

I 検討課題と協議経過

1 検討すべき課題と検討の視点について

千葉県教育委員会は、令和4年3月に、今後10年間の県立高校改革に関する基本的な考え方を示す「県立高校改革推進プラン」を策定し、生徒の多様なニーズへの対応や、キャリア教育・職業教育の充実など、県立高等学校の現状と課題を踏まえ、「全ての高校の魅力化と学びの改革」、「キャリア教育と職業教育の充実」「学校間連携」「戦略的な広報」の4点を重点事項として、県立高校の魅力化・特色化を推進することとしました。

本プランでは、県立高校の現状と課題の1つとして、人口の減少を掲げ、郡部と都市部の差について、次のように述べています。

中学校卒業者数は、平成元年以降、全県的に急激に減少してきましたが、令和4年3月から10年後の令和14年3月には、さらに約6,200人減少することが見込まれています。

特に、第1学区から第3学区までの、いわゆる都市部においても、10年後には約3,000人が減少する見込みとなっています。

また、第4学区から第9学区までの、いわゆる郡部においては、少子化に伴う小規模化が進行するとともに、これまでの再編により、高校が離れて点在している状況にあり、交通の利便性や学校選択の幅において、都市部との差が拡大しています。

千葉県は地域特性が非常に多様であり、まさに「日本の縮図」といえる状況にあります。人口減少が進む県内各地域において、人口減少が教育の地盤沈下を引き起こさないよう、少子化や地域の状況、私立学校も含めた高校の設置状況等を踏まえた高校の適正配置の在り方について検討する必要があります。

このような状況を踏まえ、それぞれの地域の特性を踏まえた高校の在り方について検討する必要があることから、中学校卒業者数が減少する中でも、教育課程の柔軟な編成や活力ある教育活動が展開できるように、県立高校の学校規模の適正化を図り、併せて学校及び学科の適正な配置を行うこととし、県立高校の配置について、具体計画の方向を次のように定めました。

○多くの友人・教職員との触れ合いや切磋琢磨の機会を確保し、教育課程の柔軟な編成や活力ある教育活動が展開できるよう、学校の規模・配置の適正化を推進します。

- 都市部では、1校当たりの適正規模を原則1学年6～8学級とし、適正規模に満たない学校や同じタイプの学校が近接している場合については、統合による多様な学びへの変換や新たなタイプの学校への再編を検討します。
- 郡部では、1校当たりの適正規模を原則1学年4～8学級とし、適正規模に満たない学校については統合の対象として検討しますが、学校・地域の状況等に配慮し、統合しない場合もあります。
- 中学校卒業者数が減少する中、活力ある教育活動を維持するため、適正規模・適正配置の観点から、10組程度の統合を見込んでいますが、学校の適正な配置に当たっては、地域における学校の在り方などについて、生徒や保護者のニーズを踏まえるとともに、学識経験者、地域関係者、私学関係者、教育関係者から成る地域協議会などにおいても意見を伺いながら、検討を進めます。
- 多様なタイプの学校の中から、生徒が興味・関心や進路希望に応じて、自分に合った学校が選べるよう、適正配置に配慮します。
- 定時制高校については、学びの機会を保障するとともに、生徒・保護者及び地域のニーズ、地域バランス等を考慮し、配置の在り方について検討します。
- 通信制高校については、県内唯一の通信制高校である千葉大宮高校を中心に、県内全域の生徒が学ぶことができる体制づくりを検討します。

これらの具体計画の方向に基づいた学校の適正な配置を検討するに当たり、地域関係者の意見を聴くために学識経験者、地域関係者、私学関係者、教育関係者から成る地域協議会を、今後は郡部だけでなく都市部においても同様に中学校卒業者数の減少が見込まれることから、県内全域を対象に設置することとしました。

地域協議会では、学校の適正配置はもとより、地域の特性や実状を踏まえ、「将来の子どもたちにとって、この地域の高校がどうあるべきか」、「どのような学びがこの地域の子どもたちに必要か」など幅広い視点からさまざまな意見を聴取することを目的としました。

また、「千葉県教育振興基本計画」や「県立高校改革推進プラン」を踏まえ、「地域における県立高校の在り方」、「地域との連携」をキーワードとして、それぞれ具体的に次の点を検討の視点として、議論を深めることとしました。

・「地域における県立高校の在り方」では、地域の産業を支える人材を輩出し、担い手育成の拠点となる学校、多様な生徒のニーズに応え、様々な機能を備え地域に貢献する学校について

- ・「地域との連携」では、企業等の地域の教育力の一層の活用、地域活性化への貢献、市町村や地域との連携・協働等について

以上の検討の視点のもと、令和５年度香取地区において地域協議会を設置し、３回の協議を重ねたうえ、本報告として取りまとめました。

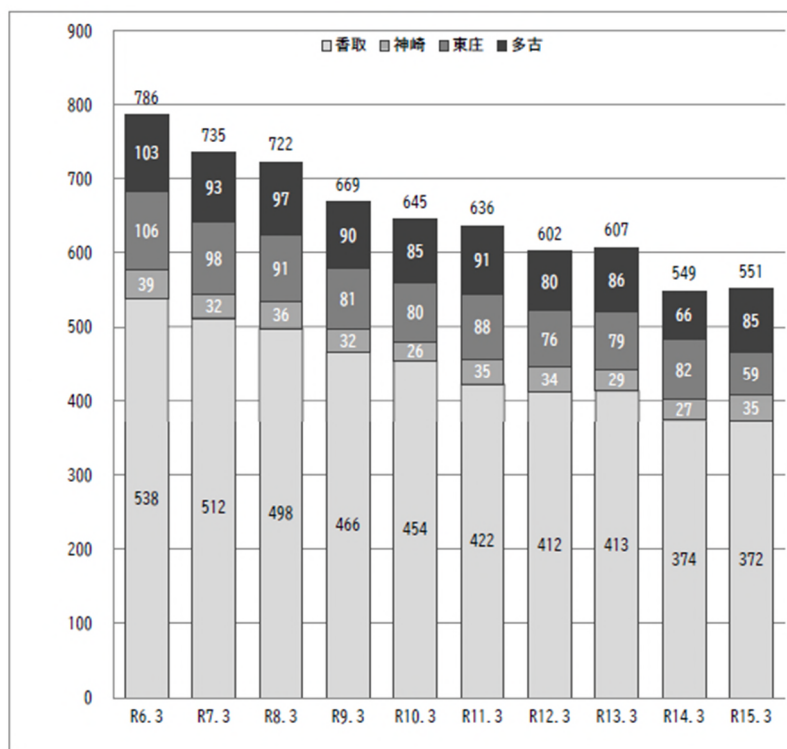
なお、香取地区における高校の状況ですが、県立高校は全日制４校（うち１校は定時制を併置）、私立高校は全日制１校、通信制１校が所在^{※１}しています。学校規模^{※２}は、県立高校全日制４校では、令和５年度入学生の学級数合計が１９学級、平均学級数が４.８学級であり、定時制高校１校の学級数合計は同年度入学生で１学級でした。県立高校定員に対する充足率^{※３}は、令和５年度入学生において、全日制では多古高校の普通科が４９％で入学生が定員の半数を下回り、定時制では佐原高校が１０％でした。一方、香取地区の中学生の状況^{※４}は、令和４年３月卒業生数は７８９名でしたが、１０年後は推計で５４９名となり、令和４年３月卒業生数と比較して２４０名減少します。このような県立高校の学級規模や中学卒業生数の減少傾向から、１０年後の学校規模は県が示す適正規模の維持が危惧される状況にあります。

※１ 香取地区の県立高校の所在については、資料編「資料１ 会議資料」９ページを参照。

※２ 香取地区の県立高校の学校規模については、資料編「資料１ 会議資料」１５ページを参照。

※３ 香取地区の県立高校の充足率については、資料編「資料１ 会議資料」１６ページを参照。

※４ 香取地区の中学校卒業生数の状況については、資料編「資料１ 会議資料」１７～２２ページを参照。



香取地区の国公立私立中学校卒業生数の推移と見通し

2 協議の経過について

第1回

令和6年1月11日（木）開催 （於：北総教育事務所香取分室 大会議室）

○ 座長選出

【議題】

- 1 地域協議会設置の趣旨
- 2 「県立高校改革推進プラン」及び「第1次実施プログラム」について
- 3 香取地区の県立高校の現状と課題

第2回

令和6年2月 2日（金）開催 （於：北総教育事務所香取分室 大会議室）

【議題】

- 1 香取地区の県立高校の在り方について
 - ・再編内容及びその評価について（佐原高校）
 - ・再編内容及びその評価について（佐原白楊高校）
 - ・再編内容及びその評価について（小見川高校）
 - ・再編内容及びその評価について（多古高校）

第3回

令和6年2月28日（水）開催 （於：みんなの賑わい交流拠点コンパス 研修室）

【議題】

- 1 香取地区の県立高校の適正規模・適正配置について
 - ・香取地区に所在する県立高校の状況について

Ⅱ 協議結果

1 地域協議会開催の趣旨

地域協議会開催の趣旨及び協議スケジュールを説明しました。

※ 詳細は、資料編「資料1 会議資料」3ページ(香取地区地域協議会設置要綱)を参照。

2 「県立高校改革推進プラン」及び「第1次実施プログラム」

次の点について説明しました。

- ・これまでの高校再編について
- ・「県立高校改革推進プラン」の概要
- ・「第1次実施プログラム」の概要

※ 詳細は、資料編「資料1 会議資料4～7ページ」を参照。



3 香取地区の県立高校の現状と課題

香取地区の県立高校の現状と課題として次のような内容を説明しました。

(1) 香取地区の県立高校4校の現状

- ・概要、沿革、募集学級数の推移、入試の状況、進路の状況について確認する。
- ・香取地区には、普通科以外に理数、園芸といった学科とともに、佐原高校には、定時制を併置している。
- ・佐原高校は、学習と部活動の両面でトップクラスの成績を目指しており、卒業生の約9割以上が大学に進学している。
- ・平成15年度に、佐原女子高校が男女共学化され、校名を佐原白楊高校とするとともに、生徒の多様なニーズに対応した学びを展開するため、単位制を導入した。
- ・小見川高校は、平成27年度に福祉コース、令和6年度に医療コースを設置し、関係医療機関や福祉施設の協力のもと、医療・福祉系人材を育成している。
- ・多古高校は、普通科と園芸科の2学科を設置し、地元と連携したキャリア教育に力を入れている。

※ 詳細は、資料編「資料1 会議資料」10～14ページ(基礎資料)を参照。

(2) 募集学級数の推移

- ・平成元年には佐原高校、佐原女子高校、小見川高校、多古高校の4校合わせて全日制合計で34学級あったが、全県的な生徒数の減少を受け、募集学級数を

- 減じるとともに再編統合を行い、現在では4校合わせて19学級となっている。
- ・小見川高校、多古高校では定員未充足が続いており、令和4年度入試においては全日制3校において合計92名分の未充足であった。

(3) 香取地区の中学校卒業生の現状と今後の見通し

- ・平成25年3月に1058名だった中学校卒業生数は、令和4年3月には789名と、10年間で約270名減少している。減少傾向は今後も続き、10年後には550名程度まで減少が見込まれている。
- ・学区内の県立高校全日制へ進学する割合は60%台を推移しており、公立高校進学者の多くが学区内の県立高校4校を選んでいる。その一方で、学区内の中学校卒業生の10%以上が私立高校へ進学している。
- ・学区内の県立高校4校に進学する割合が現状と同程度のまま推移していくと仮定すると、10年後に学区内の県立高校4校に進む数は約370人である。この数は40人学級に換算すると9クラス程度である。

※ 詳細は、資料編「資料1 会議資料」17～22ページ（基礎資料）を参照。

4 協議会委員の意見

協議会委員からは次のような意見が出されました。

(1) 香取地区の県立高校の在り方について

○普通科及び普通系専門学科・コース

- ・佐原白楊高校の共学化については、非常に良かったと思う。共学化に加え、校名も変更になったことで、インパクトのある学校となった。
- ・香取市では、市所有の空き家を改修した「さわらぼ」を活用している。この「さわらぼ」とは、さわらとラボラトリー（実験室）を掛け合わせた造語であり、「さわらぼ」は、「高校生のまちなかの居場所」、「佐原のまちづくりの拠点」、「観光客と住民の接点」の3つを活用方針としており、その担い手として佐原高校、佐原白楊高校の生徒が展示やイベントの開催等、運営に携わっている。このことにより、「さわらぼ」は高校生の自主性の発揮とまちへの愛着を醸成する場となっている。
- ・多古町では、キャリア教育の一環として、多古高校と小・中学校の交流を通じて事業を進めているところであり、事例として、学校の外国語の時間に、多古高校の生徒が訪問し授業に協力している。今後も多古高校と連携して、継続していけたらと考えている。



○職業系専門学科

- ・小見川高校の福祉コースについては、福祉関係に興味がある生徒は、コースを選択すると考える。介護人材が不足している実態があり、人材不足の解消に繋がる。
- ・多古高校の園芸科では、町の学校給食に収穫した食材を提供したり、栽培した草花をハンギングバスケットにして街中に飾り付けをしたりしている。小・中学生に対して、草花の寄せ植え体験を実施するなど、地域に根差した学科である。



- ・多古高校の園芸科は香取地区にとっては非常に重要である。ただ、農業はある程度大きい規模でやらないと成立しづらくなり難しい部分でもある。
- ・多古高校では、今年の初めにイチゴスムージーの販売を道の駅で行った。テレビでも取り上げていただき、タレントが試飲するなど話題になった。また、農業クラブが大学主催の発表会に出場し、準優勝にあたる賞を受賞した。農業クラブの取組により、多古高校を盛り上げていきたい。
- ・あるテレビのインタビューの中で生徒が「農業高校の価値をもっと上げていきたい」と答えていた。誇りをもって取り組んでいる姿が非常に印象的である。生徒が集まらないのが心配であるが、生徒が主体的に色々やっていることは、非常に良い取組だと思っている。
- ・多古高校の園芸科の生徒が生産した米や野菜、多古町の食材を使用して、多古高校の家政部の生徒が献立を考案し、小・中学校、こども園に給食を提供してもらった。多古高校の特色を生かした取組が、継続するとよい。

○社会のニーズに対応した教育

- ・多古高校は、地域と連携した取組をしており、若い世代の人の方が ICT を簡単に使いこなしている。今までは、どちらかというと地域の取組に、高校生が関わり交流することが多いと思うが、ICT の活用という部分では、高校生から地域の方に ICT 機器について教える取組といったような双方向の交流ができると思う。
- ・千葉県は農業に関しても魅力がある。また、東京都の消費を大きく支えているのは千葉県である。香取地区は特に農業は大きな魅力であり売りでもあると思う。農業の担い手を育てる学校がないと途絶えてしまう。

- ・空港圏として、将来の町の発展、地域の活性化には、高校生はもちろん多古高校の存在は欠かせない。また、空港の更なる機能強化より空港の従業員数は現在の36,000人から70,000人に増加すると言われている。雇用供給の確保を含め、学校を核とした人づくり、地域づくりによる地方創生の実現に高校の存在は不可欠であると感じている。
- ・香取地区は観光の資源が豊富な地域である。佐原は昔と比べ大きく変わってきている。香取地区の高校に観光に関するコースの設置をと思っている。國學院大学が佐原の観光まちづくりを参考にしており、協力した経緯もある。また、他の大学も視察に来ている。そのようなことから、観光のコースがあると良いと思う。
- ・昨年度に佐原白楊高校と神崎町の小・中学校とで福祉教育研究大会実践発表を開催した。3年間の福祉教育という中で取り組んできた内容を発表した。高校生を中心にグループワークなどを行って、児童生徒の交流を深めるよい機会となった。また、今年度は神崎中学校の吹奏楽部が、佐原高校吹奏楽部と町のイベントへの参加のために合同練習をするという、中学生にしてみれば、貴重な高校生とのふれあいの場を設けることができた。学校見学以外で、高校の校舎に入って、一定の時間、高校生と一緒に練習ができたことで、「ここの高校へ行きたい。」という思いを持った生徒も実際にいたと聞いている。
- ・令和4年、成田空港の従業員の内訳としては成田市に続いているのが香取市である。第3滑走路ができことで大きな雇用が見込める。東側の地区としても期待している。また、空港周辺に物流倉庫ができる計画もあり、そういったことも含めて地元で就職してもらえると良い。雇用が生まれるということで、関連した学びとして例えばロジスティクスに対応できる学びや先ほど上がった観光といった学びが香取地区の県立高校にあると良い。
- ・香取地域や多古町において農業というのは切っても切れない。また、多古高校もなくてはならない存在だと日頃から感じている。香取地域としては、サツマイモについて輸出の方にも特に力をいれており、多古米にも力をいれているところである。現在、多古高校からそのまま就労する農家の息子さんもいれば、営農指導員になる方もいると聞いている。町や地元と連携した様々な取組を経験した上で、自分自身の適性を踏まえて興味を持った職業に就職することも考えられると思う。

○全体を通して

- ・自宅から近い高校であっても魅力がないと中学生は受検しない。
- ・多古高校は、現在3クラスでかつ定員の充足率が2/3を切っているが、学校は問題なく運営できている。かえって、生徒によく目が行き届いており、良い教育

ができていと思う。40 人学級に関しては、現場では昔から多いと言われていることである。教員の配置についても、学級規模で配置されるため、生徒が少ないからといって減るわけではない。欲を言えば、人数が多ければ部活動等も盛り上がるため良いとは思う。4～6 学級となっている適正規模については、各クラス 40 名であれば 3 学級でも良いかと個人的には思う。

- ・ 成田空港の拡張に伴い、雇用が創出される。コロナの影響もあり、空港内において ICT の活用により人と接触しない手続き等が一般的になった。そういった中で、多古町から空港の人材を輩出するという点では多古町として ICT の活用の支援をすることで多古高校の魅力も上がるのではないかと。
- ・ 空港の雇用の状況とは逆で、高卒の農業関係への就職者が非常に少ない。農協としては危惧している所である。地域と交流しながら、いろんな仕事があるということを知っていただくように P R していけたらと思う。

(2) 香取地区の県立高校の適正規模・適正配置について

○望ましい学校規模について

- ・ 客観的に見て、この地区では、適正規模・適正配置を進めていく必要がある。
- ・ 生徒とその保護者は、受ければ合格するという認識になっている。適正な進路指導がしにくい現状がある。
- ・ 少子化に伴う高校の再編は必要と思うが、本町としては、今後も各高校がより特色のある魅力を持った学校として存続していくことを望む。
- ・ 保護者として、大きな問題は通学に関することであると思う。前回の協議会に出席し、地域格差があると感じた。この地域から、都市部の県立高校には希望してもいけない。住んでいる場所によって、選択肢が限定されることも問題である。簡単にできることではないと理解はしているが、例えば、進学に特化したクラスなど、各学校で学びや進路に対応できる幅を広げてほしいと思う。

○地域との連携及び地域からの支援について

- ・ 多古町近隣中学校駅伝大会である。第 64 回という大変伝統のある大会であり、1 月の最終土曜日に行われた。駅伝大会実行委員会、多古ライオンズクラブ、多古町スポーツ協会が主催するものである。多古の魅力を発信する良い機会になっているのではないかと感じている。
- ・ 多古町は空港県としての発展を求めていく中で、多古高校の必要性を感じている。今回議題で上がるように、3 クラスと縮小されている状況である。ただ、空港の機能強化はこれからで、従業員も大幅に増えていく中で、様々な業種が空港内にあり、空港に近い高校として特色ある新たな学校づくりが進められていくのであれば、東側の中心の高校になりうると思う。町も高校には金銭面も

含めて支援している。

・県立高校のため、県全体のバランスはあるかもしれないが、町として支援できることはこれからも続けていく予定である。多古町の中学校から多古高校への進学率は3割程と高く、電車はないが限られた交通網の中で地元の高校に通えることや近隣の市町からはバス、オートバイ、自転車を使って通えるため、多古町の子どもだけではなく、高校までつながった教育で地元から優秀な人材を輩出したいというのが町の考えであり、高校にもそれを求めたい。

○地域連携協働校について

・地域連携協働校の在り方については、まさに多古高校そのものだと感じる。地域連携協働校の考えとして「地域の協力・支援を得つつ地域と一体となり」とある。町としても、財政的な支援をしながら、高校と共に町の発展を考えており地域との連携も深い。また、「地域ならではの資源」についても、空港に隣接する地域にあたることから、地域ならではの資源とは成田空港だにとらえることができると思う。そういう中で、より特色のある学習プログラムを作っていける高校であり、近隣の高校と連携した学習もできていると思っている。

○全体を通して

- ・私立高校を希望している生徒の理由の一つは学校が綺麗だからということである。具体的には、トイレが綺麗だからということであった。施設の充実が大きな志望理由の要因になっていると感じた。
- ・本校の生徒数は非常に少なくなっており、中学校で欠席が多かった生徒も多いが、そういう生徒が生徒会や部活動の部長を務めるなど、色々な場面で活躍している。また、高校ではほとんど休まず生活している。すべてうまくいっているわけではなく、心の中で様々な葛藤をして生活していると思うが、教員が的確に把握し、支援してあげられるのであれば、人数が少ないことはある意味メリットな面ではないかと思う。また、人数が少ないからこそ、生徒の気持ちの変化に教員もクラスメイトも気が付き、声をかけられる。運動部においては、団体競技に関しては厳しいが、卓球やバドミントンなどなら少人数でも問題なく活動できる。また、文化部に関しても少ない人数でも楽しく活動している。
- ・適正規模・適正配置とは違う視点になるかもしれないが、高校生に「地元に残りたいか」や「地元に戻ってきたいか」というアンケートを行うと、「帰ってきたい」や「住み続けたい」という回答の割合が低い。地域をより知ってもらうため、佐原白楊高校と協力してカリキュラムを組み、色々取り組を行った結果、若干ではあるがその割合が上がった。
- ・通いやすさ。デメリットもあると思うが、多古高校のように原動機付自転車を

使用できるなど工夫が必要である。

Ⅲ 今後の検討に向けて

香取地区には、県立高校 4 校（1 校は定時制を併置）が所在し、佐原女子高校では、女子校の共学化を図るとともに単位制を導入し、校名を佐原白楊高校としました。学科構成は、普通、理数、園芸が設置され、医療や福祉に関するコースも設置されています。中学生の状況は、令和 4 年 3 月の卒業者数 789 名であり、10 年後には 240 名の減少が見込まれています。産業面では、農業が盛んであり、県内でも豊かな自然に恵まれ、観光地としても有名な地区です。また、県立の医療施設を有し、医療技術や医療人材の充実といった特色も見られます。

このような特色を支え、更に強い地域を作る高校について、協議会委員は生徒減少による高校再編を地元の切実な問題としてとらえ、お互いの立場を越え、熱心に議論していただきました。意見を集約すると次のとおりです。

- 特色や魅力のあるコース等の周知の必要性
- 香取地区の教育財産の活用方法
- 卒業後の雇用受入を見据えた地域の環境整備
- 中学校の進路指導における選択肢の提示の仕方の再考
- 地域連携協働校のメリット
- 地元市町から県立高校に通う生徒に対しての支援

協議会委員の意見を踏まえ、今後の香取地区における高校の在り方については、以下の要素に留意し、更に検討を進める必要があると考えます。

- ◎香取地区の特色を支える後継者育成を主眼として、地域に残り地元を大切に
する心を育成する教育を展開する高校
- ◎小・中学校、大学、関係機関、住民の方々など地域の教育力を学校教育に取り
込み、地域に愛され、地域とともに歩む高校
- ◎生徒減少期にはあるが、生徒がお互いに切磋琢磨し、学校の活力を失わない
ために適正な学校規模が維持されている高校

最後に協議会委員の皆様には、それぞれの立場から多岐にわたる貴重な意見を頂きましたことに感謝申し上げます。皆様の意見をもとに香取地区の子どもにとって、より活力のある魅力ある学校づくりを今後も進めてまいります。